土農田ゾンビフェスティバル！

minami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土農田ゾンビフェスティバル！

【Ｎコード】

Ｎ４２７６Ｚ

【作者名】

ｍｉｎａｍｉ

【あらすじ】

東京から新潟に引っ越すことになった安部桜は生きるか死ぬかの祭り《ゲーム》に参加する羽目に。

少しホラー＆グロ（作者の書き方次第）ときどきギャグ。一応Ｒ１５

コレはフィクションであり、新潟県に土農田市は存在しませんし、生死祭りも存在しません。

とある高校生のメモ（前書き）

これはとある高校生が書いたメモである

とある高校生のメモ

生死祭り

それは生きるか死ぬかの祭り。誰にも止められない、神にだってきっと止めることは不可能だと思う。
時間までに生き残れば、普通の朝がやってくる。死ねば…あの綺麗な朝日は見れない。

なんでこんなことになったんだろう。あの時、沢自さんや青鳥くんが言った言葉を深く考えなければ…。
こんな祭りに希望なんて持たない方がいい、なんて皆言っているけど、僕は希望を少しばかりか持っている。
きっと、終わる。きっと次の日はくる。僕はそんな希望を持ちアイツらに向かって引き金を引く。

安部桜

土農田探検

５月１２日、午前９時土農田高校
「安部桜です、東京から来ました。よろしくお願いします」
今日からクラスメイトになる人たちに堅苦しい挨拶をし、チラリと隣で立っていた担任を見ると担任は席を見渡す。
「じゃあ安部、そこの沢自がいるところな」
「（沢自って誰ですか）」
担任と同じように席を見渡すと一人だけ手を上げている女子がいた。あそこかとすぐに分かり自分の席に近づく。
好奇心なのか視線を送っているのがわかる。少し気持ち悪い。思わずため息がでそうになったが飲み込む。
席に座り机の上にカバンを置く。すると、担任が今日の予定を話し始めた。
頭の中に話が入ってくるがすぐに出て行く。そんなことは気にせず、窓から見える青空を見つめる。雲がゆっくりと動いていた。

「（ああ、今日からここで過ごすのか）」

改めて実感し、複雑な思いになり、そして…

同日午前１０時過ぎ、国語
「なあなあ…桜くん…」
「？」
右側の席にいる生徒が話しかけてきた。
黒髪に黒い肌が特徴的だ。それに同い年とは少し思えない顔立ち。

生徒はニコニコと小声で話しかけてくる。
「後で一緒に「コラ、青鳥！！」いってえ！」
「……」
教科書の角で叩かれた青鳥と呼ばれる生徒は叩かれた場所を擦る。
周りの生徒はクスクスと笑っていた。
「なに転校生にちょっかいだしてるんだ？」
「ちゃうわ！俺はただ転校生に分からないところを教えてあげようとしただけですー」
関西弁ということは青鳥くんも引っ越してきたのか、そんな疑問が浮かんだがすぐに消し、二人を見て苦笑する。
左隣の女子生徒（先ほど手を上げてくれた女子）が小声で言った。
「いつものことですわ」
女子生徒は微笑んだ。

同日午後４時、放課後
「転校生！」
「うわっ！」
カバンを持って立ち上がると後ろから肩に手を置かれた感触。思わず声を上げて後ろを見ると先ほどの青鳥がニコニコと笑い立っていた。
「いやあ、さっきはすまんなあ」
「あっ、ううん。大丈夫だよ」
「なあなあ、今から土農田探検せえへん？」
「土農田探検？」
「そや。桜くんもまだ土農田知らんと思うし、俺が案内したるわ！」
明るい声に一人の女の子、先ほどから何回か顔をあわせている女子生徒が近づいてきた。長い髪を高い位置にまとめている。
「あら、私も参加してよろしいかしら？」
「おお、花ちゃんも全然オッケーやで！！」
「えっと…」

花ちゃんと呼ばれた女の子は礼儀正しく礼をしてくる。どこかのお嬢様なのだろうか。
どういう存在か分からず戸惑っていると彼女のほうから自己紹介を始めた。
「私、沢自小花といいます。どうぞお見知りおきを」
「ど、どうも。安部桜です」
思わず二回目の自己紹介をしてしまう。すると沢自さんと青鳥くんはクスクス笑った。
「二回目やんけ～」
「そうだったね」
自分でも恥ずかしく思い思わず顔が赤くなってしまう。
「んで、俺が青鳥・D・姫華。Dはディートハルトの略な。よろしゅう！」
「安部桜です。よ、よろしゅう…あ」
僕たちは顔をあわせ、笑った。

同日午後４時過ぎ、士農田商店街
「ここが商店街や」
「結構閉まってるんだね」
「去年大型ショッピングモールができちゃって。お客さんはあまり来ないんですの」
「そうなんだ…」
商店街と聞いていたが、開店している店は少なかった。
話を聞くとココは学生に人気があり何でも色々な物が安く手に入るらしい。
ぶらぶらと歩いていると本屋、雑貨屋、カフェなど気軽に立ち寄れそうなお店が結構あった。中には隠れスポットなど。
「私、ここの駄菓子が大好きなんですの」
沢自さんが指を指す方を見ていると大きな看板があり『駄菓子屋』と書かれていた。

青鳥くんが口を尖らせる。
「里中さん不気味やーん」
「だけどいい人ですわ」
「…？」
里中とは誰だろうと思いつつ首を傾げると沢自さんが説明してくれた。
「ここの店主なんですの」
「めっちゃ不気味やで。あと、スリとか得意やさかい気をつけてな」
「う、うん」

午後４時過ぎ、士農田神社
三人それぞれ小銭を賽銭箱に入れ、パンパンと手を合わせる。
青鳥君はすぐに終わりニヤニヤ笑いながら見てくる。
「桜くんはなにを願ったんや？」
「無病息災」
「じいさんか！」
大笑いされながら突っ込みを入れられる。
「じゃ、じゃあ青鳥君はどんなお願いしたの？」
負けじと言い返すと青鳥くんはニヤリと笑う。
「もちろん恋人できますようにや。後は留年しないようにーってあとは…」
「留年…あれ、もしかして青と、先輩って…」
年上？
驚きのあまり敬語が混じり自分でも可笑しいのが分かった。一方の青鳥君はヘラヘラと力が抜けたように苦笑する。
「そんな敬語使わなくてええで。むしろ敬語やだ」
「あ、う、うん…そういえばまだ何か願ったの？」
青鳥君の願い事を遮ってしまっていた。
「あー…毎日生きられますようにって」
「僕と似てるじゃん」

クスクス笑って青鳥君を見ると、とても真剣で…少し悲しげだった。

午後五時過ぎ、士農田住宅街
「あ、ここが私の家ですわ」
「アパートなんだ」
「花ちゃん一人暮らししてんもんなあ」
沢自さんは一歩、二歩下がる。もしかしてここでお別れだろうか。
「それじゃあ、また明日」
「さいなら」
「また明日」
クルッとまわり背中を見せ、ゆっくりと離れていく沢自さん。しかし、ピタリと止まり振り向いた。
「桜さん」
「は、はい」
「あまり夜更かししたり出歩かないほうがいいですよ。特に深夜」
彼女の声が会ったばかりの時とは違う。とても真剣で、怖かった。
冷たい風が吹き、額からでてきた汗を冷たくした。
「さようなら」

青鳥君と二人肩を並べ、談笑しながら歩いているといつの間にか家の前についていた。
洋風の家で、ここら辺は日本風の家なので少し目立つ。
「ここが僕の家」
「結構目立つなあ」
同じ場所で同じ家を見つめる。自分で言うのもなんだが確かに目立つかもしれない。
「これならすぐ桜くんの家にいけるわ」
「いつでも来てよ。歓迎する」
そう言うと青鳥君は微笑み、手を振る。

「さいなら」
「ばいばい」
玄関に近づき、鍵を出す。
「桜くん」
「え、なに？」
振り向くといつの間にか目の前に青鳥君が立っていた。持っていた鍵を落としてしまう。
神社で見たときと同じ目で見つめてくる。怖い、それしか思わなかった。
「夜、絶対出歩いちゃいけへんからな」
「な、なん「なんでもや」」
先ほどとは迫力が違い、本当に青鳥君なのかと疑ってしまう。手が震えているのが伝わってくる。ゆっくりと頷くと一気に青鳥君の目が元に戻った。
「ならええんや～」
ヘラヘラと笑いながら離れ、さよならということなのか手を振って走って行った。
「二人して、何なんだろ」
「興味ありますか？」
「へ？」
誰かいると思い、振り向くと誰もいない。
そのとき、僕は狐につままれたかと思った。

ＮＥＸＴ

参加証明書を持ってきたピエロ

５月１２日午後７時、安部家
「学校はどうだい？過ごせそうかい？」
「とても楽しそうでした。過ごせそうです」
洗い物を片付けているとテレビを見ていたおばあちゃんは質問してきた。作業しながら答えるとそうかいそうかいと満足そうな声が返ってくる。
今はおばあちゃんと僕しか暮していない。おばあちゃんは今年で６６歳。因みに母と父は海外で働いているから中々帰ってこれない、だから僕はおばあちゃんと一緒に暮らすことに。
「士農田のしょたちはいい人ばっかだすけね。きっと上手くやっていけるさ」
そう言い、足元にいる白猫を撫でる。名前は王道のミケ。
今日の出来事がフラッシュバックする。確かにみんな優しくて温かかった。そんなことを思い出すと思わず顔が緩んでしまう。
「はい」
返事をするとおばあちゃんはゆっくり僕を見て白い歯を出して笑う。
「桜ちゃん、おせーふろ入りな」
「あ、はい」

ポチャン
湯船に髪の毛の水滴が落ちる。
先ほど今日の出来事が過ぎったが、１つだけ気になることがある。あの二人、沢自さんと青鳥君が言った言葉
『あまり夜更かししたり出歩かないほうがいいですよ。特に深夜』

『夜、絶対出歩いちゃいけへんからな』

なんでそんな顔色を変えて注意してくるんだろうか。そこが引っかかる。あと、なんで深夜なのか。不審者でも出たのか、だったら不審者が出たからと言うはずか。沢自さんはあまり出歩かないほうがいい、青鳥君は絶対に出歩くな。その言葉にまだ何か深い意味がありそうな気がする。

何だろう、モヤモヤする。

「はっくしゅん！」

自室に戻り濡れた髪のままベッドに体を落とす。すると、眠気が予告もなしに襲ってきた。

あくびをすると段々と瞼が重くなり…白いカーテンが揺れていた。

『あまり夜更かししたり出歩かないほうがいいですよ。特に深夜』

『夜、絶対出歩いちゃいけへんからな』

『気になりますか？』

午後１１時３０分自室

「ん…」

ゆっくりと目を開けると真っ暗。しかし、風で揺れているカーテンの隙間からほんのりと月明かりが差し込んでいる。

それを見ていると段々と意識がはっきりしてくる。

「気になりませんか？」

「…！？」

夕方、家の前で聞いた声。誰かいると思い振り向いてもいなかった。

振り向くと僕しかいないはずだったのにいるもう一人の存在。

「っ…！」

驚きのあまり悲鳴すら出ない。

男は月明かりに照らされる。金髪に真っ白な顔。そして赤く塗られた大きな唇と丸い鼻。まるでピエロじゃないか。

「そんな怖がらないでくださいよ～！取って食ったりはしませんよ

！！」
「け、警察…」
「おっとお、させませんよお」
「あ…返せ…！」
手元にあったケータイを取られる。取り返そうとピエロに突進する。しかしピエロにはぶつからず、壁にぶつかる。
「どこだ」
見渡すとどこにもいない。
「ここでございます」
「……」
天井を地面にして立っていた。何も言葉が出なくなり、疑ってしまう。
ピエロはニヒルに笑い、じっと見つめてくる。
「私、クラウンといいます。いごお見知りおきを」
「し、知るか！で、出て行け！人呼ぶぞ！」
「それは困りますねえ。せめて話だけでも聞いてくれませんか？」
「あなたと話ことなんてありません！」
「まあまあ、五分だけ」
ピエロ、クラウンは指をパチンと鳴らす。すると部屋の電気が勝手につき、テーブルと椅子が真ん中に置かれる。クラウンは椅子に座り、被っていたシルクハットを取る。
「さあ、おすわりください。座らないと何も始まらない」
「ここ、僕の部屋…」
「そうでした」
ケラケラと笑っているのを余所に椅子に座る。その途端、クラウンの顔が近づいてくる。
「興味ありませんか？」
「な、なにが？」
すごい近い顔に軽く退いているとクラウンの目が細まる。
「貴方のご友人に関してですよ」

「ご友人…沢自さんと青鳥くん？」
「そう！そのお二人！あなたは知りたいはずだ！なんで僕に顔色を変えてまで警告してきたのか！！警告の言葉の裏に何か真実があるんじゃないか！！そうですよね！？名探偵桜！？」
演技しているかのような仕草で持っていたステッキをマイク代わりなのか顔に近づけてきた。
確かにクラウンの言うとおりだった。あの二人の言葉の真実を知りたい。
クラウンは一枚の紙を差し出してくる。
「ここに貴方の名前を書けば分かります」
「な、なんですかこれ？」
「楽しい楽しいお祭りの参加証明書です。あ、因みに貴方のご友人二人も書いていますよ」
同じ紙を二枚差し出してくる。よく見ると沢自小花、青鳥・D・姫華と紙に書かれている。
本当に二人の字なのか、そんな疑問が浮かんだ。もしかしてクラウンが細工してたりどこかの悪徳商業者だったり…そんなことを思っていると咳払いされる。
「それに、貴方には十分な参加権利がありますよ」
「権利？」
「ええ。だからほら、書いたらどうですか？」
インクのついた羽ペンを差し出される。それを受け取る。
ゆっくりとインクのついた先を近づける、が、止める。チラリとクラウンを見るといつの間にか紅茶を飲んで僕を待っている。
別に生活に支障もでなさそうだし、大丈夫か。紙にインクのついた先をつけた。

参加証明書

安部桜

書いた、そんな目線を送るとクラウンは歯を見せて笑う。まるで悪魔のように。

「ご参加、ありがとうございます」

僕はそのとき、クラウンの微笑みの意味が分からなかった。

NEXT

深夜１１時５９分僕は寝た

５月１２日２３時４５分
「おめでとおございまあーす！！」
クラウンはいきなりどこからか出したのかクラッカーを鳴らす

パン！パパン！

「そんな喜ぶことな「ええ、私にとっては大喜びのバンバンザイですよ！」」
クラウンはクルクルと周り証明書にキスを落とす。正直気持ち悪い。
そんなことを思っているとクラウンは時計を見て時間を確認し始める。
「ややっ、１２時までもうすぐですね」
「……本当だ。はやく寝かせてくれないかな」
「何を言っているんです？」
クラウンは目を丸くし、こちらをじっと見つめる。
こちらからしてみればあなたが何を言っているんですか状態である。こっちもじっと見つめ返す。
少しの沈黙が流れる…が、クラウンがそれを破る。
「もうすぐでお祭りですよ！お・ま・つ・り！」
「はあ！？今日から！？」
「もちろん！この祭りは年中無休やりますよ！！」
年中無休。思わず疑ってしまう。士農田はもしかして裕福な地域なのか、そんなことを思っているとクラウンがステッキを２回ほどトントンとリズムにのって床を叩く。
「じゃあ初参加の桜様にルール説明をしましょう」
「え、お祭りにルールなんてあるんですか？」

「もちろん！」
そう言い、一台のノートパソコンを差し出してくる。ノートパソコンを見るとそこには生死祭りルール説明と書いてあった。
「せい、し祭り…？」
生死。静止の間違いじゃないかと思い目を擦る。が、生死と書かれていた。なぜだろう、嫌な予感しかしない。
クラウンが高らかに読み上げる。
「ルール説明！開催は深夜１２時から朝５時までの５時間。あなたはその５時間、生き延びてください！ただそれだけ！」
「ま、待って！生き延びるってどういうこと！？」
「どういうことって、そういうことです」
額からたくさんの嫌な汗がでてくる。手が汗ばんでいた。
生死祭り、５時間の間生き延びる、生き延びる…頭の中で単語の処理が行われている。
ふと、テーブルに先ほど書いた証明書を見つけると奪い返さないとやばいと野生の勘が働く。
急いで証明書を取る。しかし、クラウンがそれを阻止した。また沈黙が流れる…そっとクラウンを見るとクラウンが僕を睨むような目で見つめている。
「何から、生き延びるの？」
「化け物でございます」
先ほどの目とは打って変わってクラウンは満足そうな目で見つめてくる。
「化け物…具体的には？」
「そうですねえ～まあ、参加すればすぐに分かりますよ」
「はあ」
今思ったが、土農田に幽霊話などあったか。その幽霊を倒して土農田を救う、なんてゲームや漫画の世界でありそうな展開なのだろうか。それならまだ納得でき、ない。
「因みに化け物を倒すのもよし、逃げるのもよしです」

「逃げるのはよく分かるけど倒すってどうやって」
「こちらで配給している武器か参加者が持参してくる武器で倒します。武器に関しては特に規制はありません」
そう言い、いつの間にか開かれたアタッシュケースが目の前にあり、そこには黒光りした拳銃があった。
「こちらを桜様に差し上げましょう」
「ええ…」
「不満ですか？」
「いや、そういうわけじゃないけど」
そっと銃に触れると冷たい。この年になって拳銃を持つとは思いもしなかった。心の中で不安が渦巻く。本当に拳銃を持たなきゃいけないのか。だけど、そんなことを思っていると絶対にその、化け物にやられる。
「その通りでございます。１つの迷いが命を奪います」
心の中を見たかのように言ってきて驚く。
「祭り参加中に弾切れ、武器の破損などありましたら次の参加の際、修復されているでしょう」
「じゃあそのときは逃げろと」
「その通りでございます。だけどそれを防ぐ方法が二つ。他の参加者とチームを作り一緒に行動するか、死亡された参加者から弾や武器を貰うの二つ」
参加者同士の協力なども重要なのか、頷く。
クラウンは思い出したかの用に言った。
「そういえば、参加者同士の戦闘はルール違反ですよ！」
「なんで？」
「人間同士の争いはたちが悪いですからねえ。もし参加者同士の戦闘が見られた場合は審判が現れて注意。でも注意してもダメならすぐに処刑です」
処刑、その言葉を聞き息を呑む。
クラウンは肩を優しく叩く。

「大丈夫、桜様はそんなことしない」
「しないに決まってる！」
そう言い、手を払いのけるとクラウンは微笑み、時計を見る。
「さあ、ルール説明はここまで。後7分で支度してください」
「え…もう53分かよ」
時計を見ると長い針が53を示していた。椅子から立ち上がり寝巻きから動きやすい服に着替える。動きやすい服、ツナギでいいか。
「ねえ、クラウン」
「何です？」
「武器持参でもいいんだよね？武器の所有数に限りないよね？」
「お、鋭いですねえ～。武器の所有数に制限はありません」
聞いた瞬間すぐに一階に下りる。
一階の和室に入り、飾ってある刀が目に入った。刀の目の前に座り、パンと手を合わせる。
「おじいちゃん、借ります！」
おじいちゃんの刀を取り、急いで部屋に戻る。
部屋に戻るといつの間にか椅子とテーブルが消え、クラウン一人だけが立っていた。
「さあさあ後二分で開始ですよ！さあ、そこのベッドにお休みになられてください！」
「は？どういうこと？」
「体は実際自分の部屋で眠って、実際意識だけが生死祭りに行くんです」
「へえ～」
関心しながら頷き、ベッドに横になる。すると急に眠気が襲ってきた。大きなあくびをするとクラウンが笑う。
「あと数十秒です」
「ん…」
「あ、桜様」
「はい？」

「あなたの死についてはこちらは一切責任をもちません」

そんな恐ろしい言葉を聞き、眠りに落ちた。嫌な言葉だ

NEXT

一人→再会→泣く

5月13日　午前0時2分

「んー…」

もういいだろうか、ゆっくりと瞼を開けると目を疑う。

部屋がボロボロじゃないか。窓は全て割れ、灰や煤などがたくさんあり天井は蜘蛛の巣など張っている。すぐにベッドから起き上がり、地面に足をつけると「バキバキ」と地面が悲鳴を上げて部屋中に響き渡る。

「もしかして、ここ僕の部屋？」

部屋の大きさ、間取りからして自室に違いない。一体数分の間に何が起こったというのだ。見た目から推測するに部屋が燃えたような。いや、数十年も経った建物というべきか。どちらにせよ、自室が酷いことに変わりはない。

ふと、ドアの向こうから「ギシ、ギシ」と床の悲鳴が聞こえる。

「っ…！」

すぐ近くにあったクローゼットの中に入る。息を潜め、もう一人の存在にばれないようじっとする。

ギィィィ…

鈍いドアがゆっくりと開き、誰かが入ってくる。隙間から覗いてみるが隙間だけに中々見えない。分かるといえば人間らしい体格。

人らしき人物はゆっくりと部屋を歩いている。何なんだ、小声で呟くとピタリと動きが止まった。こちらも体内時計が止まったかのように感じる。

ギシ、ギシ…こちらに近づいて段々と音が大きくなっていく。心臓の脈がはやくなり、張り裂けそうだ。

「（来るな来るな来るな！！）」

しかし、ダメだったようだ。人物はクローゼットを少し開き、その隙間からこちらを覗いてきて、細い指を一本、また一本と入れてくる。その指を見ると一本一本が恐ろしく、人間の指とは思えない色をしていた。
「（もしかして、コレが…）」

化け物。

そう思った瞬間、持っていた刀をゆっくり抜く。
大きく深呼吸し、右足で勢いよくクローゼットのドアを蹴る。すぐにクローゼットから出て相手に隙を与えないよう、体の一部を貫く。すると相手の血なのか額についた。
相手を見ると刀が刺さったまま地面に倒れ、死人の臭いを出している。
「う…！」
胃の中の物が出てくきそうになる。必死に飲み込もうとするも腐敗臭の臭いで逆に出てくる量を多くした。
「おぇ…うっ…げほっ…」
絶えられず、化け物の横で口から今日食べたものを全部出した。ついでに不安と恐怖も全部。

同日　午前０時２０分
「これ、人間じゃないよなあ…」
ゆっくりと刀を抜き、鞘にしまう。まじまじ見ると完全に人間ではないということが分かる。
先ほど吐き出した嘔吐物は化け物の横にある。正直、出してよかったと思う。それに少しだけこの臭いに慣れた。
「見るからにゾンビじゃん」
顔の殆どがつぶれ、目玉が抉り出ている。もしコレが人間だったら…これが人間であってたまるか。それに人間だとしてもクラウン

が言った、審判が現れるはずだ。
「じゃあゾンビが化け物ってことか」
そう解釈し、ため息をつく。これじゃあ祭りじゃなくてゲームじゃないか。
ふと、ケータイの時計を見ると午前０時２３分を示していた。パチンと音をたてて閉じるとまたドアの向こうから「ギシ」という音がした。
「今度は誰だよ…」

ギシギシィ…

こっちに来ているのが分かる。段々近づいてるな、そう解釈し今度は先ほどとは違い、割れた窓から身を乗り出す。
「いてっ…」
窓ガラスの破片が腕を傷つけた。だが今はそんな場合じゃない、逃げなければ死ぬようなものだ。
屋根からすぐ下の塀になんとか降りようとするが、バランスが崩れ、地面に落ちる。
「いってぇ…！」
すぐに起き上がり尻の土を払いのけ走る。
後ろを見てはいけない気がする。腕を力強く振り、家（仮）から一時離れた。
当てもなしに走っていると、先ほど殺したばかりの奴等、ゾンビが放浪していた。
一気に襲ってこないよう、近くの建物の影に隠れる。
「こんなのってありかよ」
ゾンビはゆっくりと歩いている。ここを突破するにはどうすればいいんだ。最近来たばかりだからまったくここ、土農田の地形を知らない。
肩に変な感触がした。

「だ…、」
振り向き、銃を構える。しかし、見覚えがある人物、沢自さんと青鳥君の顔を見た瞬間引き金を引かず安堵する。が、沢自さんが光の速さで首元にナイフを持ってくる。血の気がゆっくりと引いていく。
「あれほど、あれほど夜遊びするなって言ったのに…」
「し、してないよ…！」
「じゃあ現になんでここにいるんです…！？」
「花ちゃん落ちついて」
小声の言葉攻めを喰らう。一歩後ろに下がると、青鳥君が顔色を変え、メリケンサックみたいな武器をつけてこちらにパンチしてくる。もうだめだと思い目を瞑ると背後で「ドサッ」と倒れる音がする。後ろを向くとゾンビが一人血を流して倒れている。そんな姿を見て手が汗ばんだ。
「二人とも、話はやつらがおらんところでぼちぼち話しようや」
「そうですわね。じゃあどこか安全な場所を探しましょう」
「さ、賛成」
それぞれ武器を出し、いつ襲われても対抗できるよう構える。
沢自さんが先に走り出し、持っていた薙刀をゾンビに向かって振るう。ゾンビは上半身と下半身をばっさりと切られ、血飛沫を出す。
その血飛沫が沢自さんの体に付着する。その時、沢自さんが不気味で美しいと思った。

同日午前1時
僕らは廃墟の家に入り休んだ。ただ、沢自さんだけが僕を見つめてくる。
「話、してください」
沢自さんの声はすごく冷たくて、怖かった。最初会った時のあの温かい声はどこにいったんだ。
青鳥君も真剣な目で僕を見てくる。

戸惑いながら、ぽつぽつと呟いた。
「二人の、夜遊びするなとか出歩くなって言葉が気になって、それで、証明書書いちゃって」
「…馬鹿」
沢自さんの右手が上がり、僕の頬を叩いた。じっと沢自さんを見ると、ワガママな子供を見るかのような目で見つめてくる。ため息をつくと今度は胸倉を掴まれる。
「書いちゃって？それで済むと思ってるんですの！？」
沢自さんは唇を噛み締め、震えている。
「なんとなくだけど、あの証明書に名前を書いたら一生祭りから逃げられないとは思ってた」
どこかで、分かってたんだ、もう後戻りできないって。だけど書いてしまった。今でもなんで書いちゃったのだろう、明日聞けばよかった話なのにと疑問と後悔が心の中で渦巻く。
苦笑しながらいい訳じみたことを言うと沢自さんはゆっくりと離れてくれる。
「もういいです、姫華さん行きましょう」
「や、でも」
青鳥君は心配そうな目で見つめてくるのが分かった。小声で「いいよいいよ」と青鳥君に言うと沢自さんが睨んでくる。
「桜さんは分かってて書いた、ということは一人でも大丈夫ってことですわ」
「せやけど！」
今度は青鳥君と沢自さんがもめ始める。それを余所に僕は部屋から出た。
「おやおや～喧嘩ですか？」
「うわっ！」
廊下を歩いていると突然目の前にクラウンが現れ、白い歯を見せて笑ってきた。そんなクラウンにうんざりし、ため息をつき、また歩き始める。

クラウンは瞬きをする。
「図星ですか」
「まあ…」
「アヒャヒャヒャヒャ！」
曖昧な返事をすると大笑いされる。銃を出し、クラウンに向かって撃つ。しかしクラウンは地面にしゃがみ、避ける。
「せっかくチームを作ろうという話を出そうと思っていたのですがねえ。小花様がお怒り中そんな話したら逆に怒りをかってしまいますよ～」
「ですよねー…」
この祭りは参加者同士の協力が必要と感じる。現に青鳥君と沢自さんは一緒に行動していた。
「まあ、別にあの二人とチームを作らなくてもいいじゃないですか。他にもたーくさん参加者いますし」
「あ…」
たくさん参加者がいる、その言葉に確かにそうだと感じる。今まで青鳥君や沢自さんだけが参加していると思い込み、あの二人とチームを作るとずっと思っていた。クラウンに言われ、改めて他にも参加者という存在を思い出す。
「それか、自ら募集してみるとか。もちろん桜様がリーダー」
「そっか…それもありなのか」
「ありですよー！それじゃ、そろそろ私はお茶会がありますので～」
「自分だけ高みの見物ですか」
「えへへ」
クラウンは舌を出し、無邪気に笑う。その顔を見ると少しイラッときたが殺意までは沸かなかった。
二人で外に出るとクラウンは鼻歌を歌いながらどこかに行った。
なぜだろう、クラウンと少し話したら緊張が解けた気がする。
後ろから誰か走ってきた。
「桜くーん！」

「青鳥君」
青鳥君は近づいてきた途端頭を下げる。
「ほんまかんにん！」
「え、なんで」
「そやかて、俺らがあないな理由も教えへんで深入りするような言葉言ったから」
「むしろ深く考えすぎちゃって、簡単に証明書書いちゃった僕が悪いんだ、ごめいて」
頭を下げると青鳥君の頭にぶつかる。打った箇所を必死に抑える。青鳥君も同じように抑える。すると青鳥君が吹き出す。
「よかった、桜くんいつもどおりや」
「う、うん？」
その言葉によく分からず、頷く。
「それより、これからどないするんや？」
「あー…一応チーム作ろうかなって考えてる。最初青鳥君たちと一緒に行動しようと考えてたけど、今の状態もこんなだし、今の僕だと足手まといだし」
力ない笑みを見せると青鳥君は苦笑する。
「そっか。じゃあ、わかんないことあったら何でも教えるさかい。同じチームじゃなくても友達に代わらないさかい！じゃあ！」
青鳥君は沢自さんがいる廃墟に戻って行く。
それを余所に、僕の目からはボロボロと大量の涙が出てきた。

NEXT

ピエロのキスと女の悲鳴

5月13日午前3時
まだ少しだけ面影が残っている元大型ショッピングセンターの屋上に、二つの影があった。
1つは紳士服をきたクラウン。
もう1つはブラウスにスーツを着て眼鏡をかけている女性。
「いやあ、やっぱり温かい紅茶は身に染みるねえ」
ティーカップに入った紅茶を静かに飲むクラウン。その横で一人の女性が冷ややかな目で見つめる。
「今日、新たな人を参加者にしましたね」
「ええ」
「その方は参加させる予定ではなかったのでは？」
手元にある紙の束を一枚一枚捲っていく。そこにはたくさんの名前が載っている。
クラウンは不気味な笑いを零した。
「別に一人や二人増えたって問題ないでしょ、一二三ちゃん」
「ちゃんを取ってください……こうやってまた、猫みたいにどこかから拾ってくることが増える可能性があります」
「ないよーないない」
クラウンが口を尖らせると一二三（ひふみ）と呼ばれる女性はため息をつく。
背中に終いこんでいる銃を出し、スライドを上下させる。

パン

「おや、まさかいたとは…一二三ちゃんありがとー」
「だからちゃんは取れと言っているでしょう」

パン

「僕に向かって撃つなんて怖いなあ～そんなことしてると審判来ちゃいますよー」
「何を言ってるんだか」

一二三は鼻で笑い、最後に一発と、クラウンの頭めがけて撃った。
その途端、クラウンは額からたくさんの血を流し、倒れる。血の臭いが漂う。平然のとした顔でクラウンに近づき、長い髪を引っ張り顔を持ち上げた。
「また偽物ですか」
額から血を流し、顔中真っ赤だ。
一二三はクラウンの体を持ち上げ、外に投げた。すると下にいたゾンビが落ちてきたクラウンの体に群がり、体中を抉られる。まるで飢えた人に餌を差し上げたかのよう。
「ほんと、酷いなあ一二三ちゃんは」
「……」
眉間にしわを寄せ、後ろを振り向くと、先ほど死んでいたクラウンがいた。下を見つめるとゾンビに食されているクラウンの死骸。
クラウンは高らかに笑い、こちらに近づいてくる。
「だけど、そういうところ私は好きですけどね」
跪き、一二三の手の甲にキスを落とすと、一二三の体中に虫唾が走った。
「いやあああああああああああああああ！！」

いじっぱり

５月１３日午前４時５０分
「なあ、ほんまにええのか？」
「なにがですか？」
「桜くん仲間はずれにして」
動いている足を止め、付いて来る青鳥を見つめると青鳥も見つめ返してくる。
「知りません、あんな人。桜さんのところに行きたかったらどうぞ、行って下さい」
「ほんま、いじっぱりやな」
「…別に」
適当に流し、再度歩き始める。すると青鳥も歩き出す。
何が仲間はずれだ、あっちが適当に参加したのが悪いんだ――。
自分の罪悪感を消すため言い聞かせた。
「俺達も、あかんとこあったんやないか？」
「……」
「あんな理由も教えないで夜出歩くなって攻め寄ったから」
分かっていることを言われ、小花は段々と苛々する。持っていた薙刀を力いっぱい握る。
青鳥は最後の一撃みたいに言った。
「俺達も、謝る立場とちゃうの？」
その瞬間、小花は本当に頭にきたのかしゃがみ、叫んだ。
「分かってます！こっちも悪いところあったって。だけど、だけど私にもプライドが…ああ、めんどくさいですわ！！」
それを見た青鳥はため息をついた。
「（それこそまさに、）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4276z/

士農田ゾンビフェスティバル！

2011年12月29日12時53分発行